

せつせつせ 雛罌粟咲いてぱらりとせ

句集名となつた一句。作者の愛着のほどが察せられる。意味があるような無いような。せつせつせ“は昭和初期頃のわらべ唄の出だしの一節である”ぱらりとせ“は花の形容とも作者の心象的な造語とも想われる。何気ないようだが”せ“の音の重ねの感色に惹かれる。この口調に執しているのがこの句集の特色となっている。音の感色からくる独特な軽妙さの調子を是とするかどうかが評価のわかれるところ。魅力的ではあるが評者にとってはまことに扱いにくい句集であるといえる。

春季から

やつかいな正月の富士詠み初めに

青麦の放てる夜気と覚えけり
好意ありがたく綻ぶ梅のなか
未完なる塔にしぶけり櫂の芽

花桃のやいのやいのと日表に

世の習いではおめでたいものの代表格の富士が作者の手にかかる”やっかいな“な存在として登場する奇妙さ。詠み初めの句をたずねるのは野暮。”好意ありがたく“と述べて

はいるが実のところそれほどでもない作者顔が浮かぶ。”やいのやい“というような語形はしばしば出会う。形容というか擬態語の用い方は自家薬籠の感。

夏季より

切り出してここら青嶺の水利権

あぢさゐの色ならぬ色みえくる日

柿芽吹き蟹の缺のやうな芽を

曲ることついつい忘れ優胡瓜

月の夜の海月が考へさうなこと

”青嶺“のあとに裾えた”水利権“に景の、言葉としての意表外の飛躍がある。月の夜の海月が”考へさうなこと“とは一体どんなことであらうか。海月の化身である作者に問うほかな

秋季より

人間に雲脂といふもの秋立ちて
虫の夜のあ利尿剤利きにけり
敵はない人の句を誦す夜長なり

”雲脂“は人間だけにあつて他の生きものには無いものなのであろうか。思つてもみないことだが。”敵はない人“など複雑な今の世に居るのであろうか。ましてややかましい俳句界においておや。そのような人の句は味気ないであらう。

冬季より

風花に取り込み忘る男物

きさらぎも半ばつるりと虚子の貌

東京に出でゆく御用納めの日

鰯の口この一年をしめくくる

避寒地に降り立ち一本目の櫻

ホトトギス派にとつては神様をもしのぐ虚子をこのように戯画化した俳句を見たことないが、確かに虚子の一面をうかがわせている。上下にかかる”半ばつるり“は何とものの趣き。一本目の櫻”は”避寒地“を受けた目線か。

恣意的に載せた以上の作品のほか句集全般に通じて感じられるのは、対象を捉え、そして表現する眼線が正眼ではなく斜眼、斜視的であると言える。斜めから見た独特なおもしろさに軽妙さが添っている。この軽さは俳諧的な”かるみ”とは違った現代的な”軽さ”おもしろさ”であって作者にとつてはそれが自然体なのである。現代は正面から見た俳句が殆んどどときに、斜めからの目で簡明に詠う作者の存在はまことに貴重といえる。

なお、集中には筆者が住む信州で取材した作品を多くみる。身近な愉しさで読ませていただいた。その一部を紹介しておく。

人混みよりわが身抜き取る出開帳

善光寺お開帳の作は多くあつた。地元であるが故にお詣りしなかつた筆者。

起請文累々芽吹く社にて

”生島足島神社“の前書がつく。上田市塩田にある社はその位置を本州の中心地であると謂っている。”乙鳥に乙鳥い　ろの朝鮮人參小屋”も塩田。西塩田から丸子町にかけて薬用

人参の栽培が盛ん。最低三年の小屋掛け作り。

訃報告ぐ子の名は穂高立夏経て

碌山のタツチ若葉のやはらかさ

わさび田の水を束ねる處あり

初句には「田淵ひで子さん逝く」の前書がつく。故人は濱 同人で感性ある作品をのこした。夫君行男氏は高山蝶、雪形などの山岳写真家で記念館を残す。”碌山“は彫刻家の荻原碌山。古いことだが昭和三十年代に林火先生と安曇野へ夫妻を訪ねた一日が想い起こされる。

一疋のねりぎぬ月の千曲川

月下の千曲川の流れを”一疋のねりぎぬ“とはまことに微妙。島崎藤村や五木ひろしとは違った千曲川がある。

作者は心臓疾患をかかえておられるので無理せずに一句一句と高沢俳句の大成を期していたきたい。

師走妻うしろをよぎり前よぎり

蒲団のずれ直し呉れをる妻をうつつ

病床にあつた作者をみとる夫人のうごきを描いた二句を添えておく。

老筆多謝

平成十六年五月号 「濱」 所収

(筆者は 濱同人 信州在)